

入選

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「できる喜び噛み締めて」

神奈川県・横須賀学院高等学校3年 菅野 亜維

当たり前にできた事ができなくなるとは、思ってもいかなかった。私は、家族や関わってくれた人のおかげで小・中学校では一日も休まずに学校生活を送ってきた。何より、大きな病気・怪我や入院・手術をしたことがないのが、誇りであった。高校でも密かに皆勤賞を狙っていたが残念ながら叶わず、この大記録はストップした。だれでも生活をする中で怪我はつきものだ。その瞬間は当然やってくる。忘れもしない高校一年の球技大会の事である。種目は「ドッジボール」だ。しかも使用するのは柔らかいボールではなく、バレーボールで行う。そのボールが右手の指先に当たったのだ。今までに経験した事のない激痛が走った。しかし平静を装い、そのまま試合続行。心の中では「大丈夫。どうせ突き指だろう」と自分に言い聞かせた。ところが数日後、指を伸ばそうと思ったら伸びないのだ。慌てて病院に行った。診断結果は、右手の中指・人差し指の第一関節骨折。診断してくれた先生も「二本やる人は、めずらしいよ!」と一言。診断名は「マレット変形」の骨折を伴うものだった。一番驚いたのは私自身だった。真つ先に出たのは「どのくらいで治りますか」という言葉だった。すると「全治二カ月で手術が必要。ここで手術を先延ばしにすると、指が動かなくなるかもしれない。針金で固定して骨がうまくつかなければ、最悪の場合、指を開いて手術しないとダメだから」と付け足された。私にとつて絶望的な宣告だった。私は、もうピアノもフルートもできなくなるかもしれない。何より吹奏楽という大好きな部活を一カ月も休まなければならぬ焦りや不安でいっぱいになった。でも迷わずに手術をする決めた。

それからというものが、たった二本の指が使えないだけで、当たり前にできた事ができなくなつた。まず、字を書く事だ。右利きなので左

手で書く練習をした。いつもの二倍・三倍もの時間がかかった。ペットボトルのキャップも開けられず、毎日食べていたお菓子の袋も開けられない。人に頼んでまで食べる気にならずに痩せた。また吹奏楽部の演奏会の時、恒例の「おそろいポニーテール」にする為に伸ばしていた髪も、ばつさりショートにした。手術を終えたものの、針金が入っている為、毎日、消毒に通つた。

辛い日々ではあったが、これが私に大きな影響を与えるものとなつたのである。リハビリを受ける中で出会つた理学療法士の先生とお話する中で、リハビリに興味を持つようになった。そして作業療法士という職業を知つた。その中で自助具にも出会つた。自助具で、できなかったことが、またできるような喜びを強く感じた。もともと人と関わる仕事をしたいと思つていた私だが、この経験と出会いは作業療法士になりたいという具体的な目標を与えてくれた。一人一人にあったプランを考え、その人がその人らしさを取り戻していくお手伝いができる。日々、作業療法士という醍醐味に引き込まれていく自分がいた。

私には、七十四歳の認知症の祖父がいる。私が小学校に上がる時に倒れ、心肺停止の状態だった。奇跡的に一命は取りとめたが、後遺症が残つた。家族の名前や思い出の記憶を全て失つた。私の名前も分からなくなつてしまった事は幼いながら悲しかった。でも、あきらめないで祖父の顔を見るたびに名前のテストをした。おかげで私の名前だけは覚えてくれた。今では毎日の日課になった。祖父との関わりの中で小さな発見や学びが沢山ある。だから祖父には作業療法を通して病気になる前のように祖父らしく過ごせるお手伝いを将来したい。

高校三年になり夢に向かって一歩ずつ進んでいる。いまこの道を志す私がいるのは怪我があつたから。次は私から、作業療法という種をたくさんの人に広げていきたいと思つた。